

書肆えん通信

No. 1

2015・06・01
書肆えん
秋田市新屋松美町
5-6

「はがき禅」から……………亀谷健樹 1

「はがき禅」から

亀谷 健樹

■第二六四信（昭61・1・30）

以前からぜひお会いしたいと思っていた、秋田市の詩友（注、泉谷連子）をお見舞いがてら病院にお伺いした。両眼がほとんど失明状態の上、補聴器を使っ
てやっという難聴。しかも言葉がすこぶる不自由とい
う三重苦の六十余歳の女流詩人である。手さぐりでお
茶菓子等をもてなされたあと、ゆっくり対話した。

詩の話が主であったが、これまで私の作品等でご存
知なのか、寒行托鉢や梵鐘の事など聴かれた。そして
私の脚にさわり「毎朝一時間もお経よみながらこれで
歩くの」とか「鐘の音が聴けたらどんなにいいでしょ

う」などと感慨をもらされた。

お見舞いにと桜餅など持参したのですぐ開包してさ
しあげたら「ああ、春のにおい」と顔をほころばせた。
辞去する時、詩人はわざわざ廊下まで出てきて見送っ
てくれた。私は背に心の視線を感じ、なんとという温か
さだろうとこみあげてならなかった。

帰る道すがら、ふつうに見たいものが見え、なんで
も聞こえ、話せるという当り前が、どんなに有難いこ
となのか、と痛切に思われた。その日、私はたくさん
の生きた教訓を得たのである。

■第三六五信（平3・6・18）

この間、二十年ぶりに第二詩集（注、『しべぶとん』
を刊行した。いろんな方に送呈申し上げているが、読
後の感想を毎日のごとく頂戴し、有難いと思う。とる
にたらない詩の片々にすぎないが、どなたさまも作品

の奥に（仏教者の眼）といったものを感じていらっしやるのを教えていただいた。

やはり私は、仏の弟子なのだ、と痛感する。釈尊が、バーラナシーの鹿野苑にいらした時、遊行の旅に出る弟子たちに示された言葉がある。

生きとし生けるものの利益と幸福のために、いざ遊行せよ

一つの道を二人して行くな

遊行というのは、伝道の旅である。〃一つの道を一で行く〃旅である。「二人して行くな」とは、なんという厳しさであろう。徒党を組むなという。

先日、朝日の記者が（著者訪問）の記事取材の為、来寺した。いろいろ質問があり答えているうちに、私はやはり現代の良寛さんみたいでありたいのだな、と気づいた。子ども達と遊戯し坐禅に親しみ詩をたしなむ根底は、本来の自己を極める事、そのものである。

■第三六七信（平3・7・15）

昨日、詩集『しべぶとん』の出版記念会をやっていた。花束など頂戴し晴れがましく照れっばなし

であった。しかしコールつくしんぼのコーラスや小坂和子さんの音楽を入れた詩朗読などすばらしいプレゼントに接し、またそれぞれのスピーチなど、詩集の誕生を心から祝福していただき、感激した。

こんな田舎町で、こんなハイレベルの芸術的感興にひたれるなど、参会の皆さんも思いもよらなかったらしい。

さて二次会は、県内詩人の連中だけであったが、うちの寺に来てもらった。ちょうど蝉の声にまじって、ひぐらしが啼いた。誰かが「このお寺は、ひぐらしを飼っていますな」という。菩提樹や擬宝珠の花が真盛り。ときに夕べの梵鐘の音が、心にしみるようにたゆたう。

この詩集は、すべての人や物たちに育まれている。著者あいさつの時「阿仁部にはいろんな宝物がある。これを詩作という方法で発見し提供するのが私の責務。詩は生との戯れ。私の骨を埋める故里に土着し、生きる喜びを次代に伝える架け橋がこの詩集」と話す。かくの如く詩集は、ひとり歩きを始めた。

■第五一〇信（平10・3・18）

〈北東北子ども詩大賞〉に係係して五年になる。毎年、三県の小中高から詩を募集した。大賞、入選、佳作等を選評し、作品集に掲載して応募者、学校等に賞状賞品と共に送付する。それには勿論、資金と労力を必要とするが合川町当局や教育関係者の絶大な支援を得て、そのつど刊行してきた。

さて目的は、要するに詩の心の復活である。詩作により創造の喜びを持つ。子ども時代から故里の風土に関心を持ち、感性を豊かにしようとする試みである。先頃のポケモン騒動は単にマスメディアを受けるだけの弊害であり、自分が創り、自分から発信する状態でなくなつた事への重大な警告と思う。これをいま改善しなければ大変な世の中になる危機感から始めた運動である。

いろんな事があつたが、次の勝平養護学校の先生の添え書きは忘れられない。「上肢に障害のある児童は書写が大変である。どうしても書けない場合は教師が代筆をした。中には手の指が欠損しているため足で書いた詩もある。しかも明るくひたむきに〈生〉とむきあつた生活である」と。私たちがかえつて学ぶべき、創造する人間の原点だ。

■第五四六信（平11・11・16）

爽秋の一日「あきたの詩碑めぐり」を、十人衆として遊行した。短歌とか俳句の碑はあちこちにあるが、現代詩人の碑はきわめて少ない。一日で五ヶ所を回つたが、それぞれ土着の生き方のすごさ、自己をみつめる厳しさと、恵まれた秋田の風土の影響を実感した。

この企画は、詩人たちの集まりで「年をとり暇になつたら、県内詩碑をたずね先覚詩人を巡拝したいものだ」と話したのがきっかけである。

思えば私たちの毎日は、あまりにも忙しすぎる。また映像とか音や活字のはらんで、溺れもがいている毎日ではないだろうか。その異常といえる現状から立ち直る方法として、静的には坐禅があり、動的には大自然の生命力を象徴した詩碑の探訪がある。本当は山頭火風にあじろ笠をかむり杖をつき、飄々と歩きたいが、そうもいかぬ。

だが今の世相はその位の徹底した姿勢とゆとりが無ければ救われぬ。その点で、次の絶唱は真の救いの道を示す。

あんべひでお詩碑〈春雪〉

こうしなければならぬから

こうしているのだというふうに

自分の降りてゆく路を

大きな目玉をあけて確かめながら

雪はゆつくりしたおもいで降っているようだ

■第五六一信（平12・7・1）

〈宮沢賢治を語る会〉の講師を依頼された。とても無理と思ったが、強い要請についてお受けした。忙中閑あり、賢治をひもとき、久しぶりに賢治にあいまみえた幸せと、喜びは大きかった。

今回は「野の師父」「雨ニモマケズ」妹の死を悼んだ三篇を、朗読を中心に話した。特に「永訣の朝」など、誦んでいる私自身、こみあげてきて声がふるえた。参会者からあとで、涙が溢れでてどうしようもなかった、との感想を聴く。死を迎える全ての人への哀歌。

また有名な手帳の「雨ニモマケズ」について、私は調停委員在職時「北ニケンクワヤソシヨウガアレバツマラナイカラヤメロトイヒ」をいつも調停者の心構えの根にすえたこと。「南ニ死ニサウナアレバ行ッテ

コハガラナクテモイ、トイヒ」を宗侶のもつとも大事な役目だと思っているが、実行は難しいと述べた。これは自らの生死観が確立して始めて出来る言葉かけなのだ。

更に「ミンナニデクノボートヨバレ」については、要するに「ホメラレモセズ、クニモサレズ」の、平々凡々の人間像は、きわめて東洋的な、しかも菩薩の行願を形にあらわした名称と話す。

■第五九八信（平14・3・16）

一冊の詩集をいただいた。『いろはにはへどちりぬるを』という。九十一歳、坂本梅子さんの第九詩集である。

私は永く詩を通してのお付きあいでも影響を受けた。久しく消息不明であったが、先日やっと西木村のケアハウスに入居されると知った。それがこの度突然、紅葉の葉っぱがひらひらと私の肩にとまった。手にとると表紙が黒地で三つの鮮やかな紅葉の切り絵。それに白抜き詩集名。二十三の詩篇がその中で自在の光彩をはなっていた。

〈いろはにはへど……〉は空海の作といわれる。諸

行無常を表わす。あらゆるものは変化する意。誰しも病み、古い、そして死ぬのを避けられない。それを単なる諦めでなく、生死や変様と真正面に向き合う詩魂は流石である。

集中「裸の山に向う」の最終連

こうなれば かりそめの うす紙なさけの
人のつくった白い老いの白いやかたの ちゃちな
われなど消えてしまえ と思う
われと向う果ての山

これは人間を越えた世界。いのちそのものの森羅万象になりきっている。詩は青春の所産というはたわ言。感性は鋭く流転の深い境涯を貫き通すのだ。

■第六三〇信（平15・9・1）

いつも和服を召して清楚な物腰の、宜野座保子さんの詩集『紅つばき』を拝掌した。昨秋逝去されたがご主人が遺稿を上梓する。その中の一節

そうだそれをめくり待っている頁の中へ

立ち止まることなく進むのだ
広がりゆく秋空のコバルト色を染め抜いて
光りと風に乗って舞う木の葉の様に――

私は、生死について、まさにその本質をつらぬく感性と思った。誰にもかならず訪れる死。だがこの詩人の魂で処するならば、決して恐怖することは無いのだ。木の葉のように風に舞い落ちる生。それは秋空をコバルト色に染めぬくように、大いなるいのちの中に溶けこむ喜びの表現であろう。

ご夫君の通男氏の著書『リラの花――亡き妻を偲んで』も、一緒に頂戴した。これほど夫婦愛に満ちた追悼文集は、たぐいまれであろう。生い立ち、結婚、家族、詩友、療養、葬儀など、実に克明に記録、総括されている。特に入院中の日誌など、涙なしでは読めない。この骨格を成しているものは、深い宗教性だ。ご夫妻は共に佛教に帰依しておられた。日常の一挙手一投足がその結実で、この本にすべて盛られている。

■第六四八信（平16・6・15）

秋田市で泉谷連子を偲ぶ会が開催された。この詩人

の遺稿詩集刊行を記念しての催しでもある。没後六年にしてその詩集を畠山義郎氏が発願いたし、詩人や関係者の協賛によって成就した。

偲ぶ会では泉谷連子の入院中の事を聖園病院の元婦長、看護支援者。退院後は民生委員や詩友など、こもごもにエピソードが語られた。いずれも日本のヘレン・ケラーともいえるべき、精神性の高さと清純な日常を讃えられた。

私にとつても二度の出会い、詩人の究極の生き方を教えられたのと、数多くの手紙はその度に、天からの散華の様にいただいた。眼や耳や言葉の障害がしだいに重症となり、貧しくどん底の生活であったから、泥中に咲く白蓮華の詩境を開示しえたのであろうか。

次の、絶唱ともいえる二行の詩

使徒

ながれのなかからたちあがつてくるひと

ながれのかなたにたちさつてゆくひと

これは詩神ミューズが遣わされた詩人泉谷連子そのものである。いま天啓の調べを聴く様に、酷薄のさなぎから甦る蝶を観るが如く詩集をひもとく。

■第六九九信（平18・10・2）

この間、市公民館講座『現代詩』の受講者二十名が来寺した。いつも講座室なのだが、たまにゆつくりと詩のピクニックで館外研修をしたら？ との提案に乗ったわけである。それで北欧の杜公園散策、お弁当。午後からうちの寺に来て佛像鑑賞、庭園遊行、お茶会、広間で詩の勉強など盛り沢山であった。当日はさわやかな秋日和。みんな喜々として詩の花を摘んでいた。

ところで今回の詩の教材に、私の新著『やすらぎの埋み火』の「行茶一服」欄の拙詩を引用した。「息」と「立」の二篇。（ヒトはなぜいきづくのだろう）から始まる自作自解だが、生きるとは息づくことである。息がとまると死だ。息をし続ける働きの不思議さ。

『健康で長生きする一日の法』がある。（日に一回自分をほめる）（十回大笑いする）（百回深呼吸する）（千字を書く）（一万歩歩く）を続ける。この中の深呼吸とは腹式呼吸。いくなれば坐禪の呼吸法。だから長寿法だ。

この世に出生して吸う息、吐く息を調えるのがどん

なに大切かを説いたのは、講座の皆さんに文学を越えた永遠の生命に、詩の手を触れてほしかったのだ。

■第七〇四信（平18・12・16）

秋田文化出版社の創始者、吉田朗さんが逝去された。そのお別れの会に参席した。私の第一詩集『樞』は、氏のおすすめでやっと日の目をみたものである。それまで詩作は単なる趣味の範囲に過ぎなかったが、それからはにんげんの詩を書くこうと本腰を入れるようになった。とにかく亡くなる直前まで、同人誌・レジャー誌、豆ほんこなど、幅ひろく温かいご交誼をいただいた。とにかく誉め上手な方で、出会いはいつもほめ言葉から始まった。ほう髪をかきあげ破顔一笑。いつも大声の秋田弁は、どこでも『日だまり』の一郭をつくる、さわだった存在であった。

さてホールの正面に、遺影が飾られていた。生前のエピソード、追慕の言葉が切々と語りかけられた。感動的だったのは、有名な新井満訳の《千の風になつて》を故人が秋田弁に『翻訳』した詩の朗読である。

おらの

はがしよのめやで
泣がねでたんせ
そごにおらだの
えねんだすよ
はがしよでだの
ねでなんかえねんだすよ
千の風だすよ
千の風になつて
あのひれえ空どご
吹ぎわだつて
えるんだから
—朗さんがあきた弁の詩の風と化した。

■第七四二信（平20・10・1）

現代詩講座の野外研修企画《詩のピクニック》に参加した。絶好の秋日和。豊年満作の黄金色に染まりきみまち阪に集合。主たる目的のあんべひでお詩碑を見学。昭和四十七年に建立。没後十年目に友人関係者の敬愛が見事に結実。碑面に直筆の名作『春雪』を刻む。—こうしなければならぬから／こうしているのだと

いうふう／＼自分の降りてゆく路を／＼大きな目玉をあけて確かめながら／＼雪はゆっくりしたおもいでふつてゐるようだ――

生前のあんべに会ったが、大きな目が印象的であった。その目玉で未知の白道を確かめ舞いおりるといふ生と死の境をつきぬけ、ただ春の雪の億万のなかまたちと戯れながら。その中のひとりのおもいがきらめきやまぬ詩。

碑の背面にあんべの生涯を記す。詩歴の他に凡そ「一九四二年海軍に入り西南太平洋上を転戦。帰還四年目に本荘療養所で病臥十四年余。戦争は彼の心の中で遂に終ることがなかった」と。文の結びの無念さは悲痛極まりない。

造立後三十六年。直下の大師岩遙観所の清水は絶えることなく、草や樹と共に、詩碑は秋の静寂を息づいていた。

■第七八三信（平22・9・15）

北秋田市現代詩講座、秋の「詩のピクニック」は今年、男鹿半島を遊行。楽水亭庭園で有名な大龍寺を拝観。中でも龍王殿は多宝塔様式で、最上階に鐘楼堂を

兼ねるのは日本で唯一という。大梵鐘を撞いて福德円満を念じた一同は最高の笑顔であった。お天気も最高。次に、門前の五社堂参道に建つ澤木隆子の詩碑を訪れる。寒風石に黒御影石をはめ込んだ造り。題名は《杉》。

驚かず

怒らず

悔やまず

風吹けば風を受け

雪降れば雪をいただき

陽かがやけば光る

直ぐなる性よ

忘れられて卑下せず

久しき年輪を重ねて誇らず

しっかりと大地を抱く

大いなる愛

斯くあらばやと仰ぐ

ふるさとの杉

秋田杉を造林した澤木家の先祖と、日本の母親を表現したものと言われる。格調の高い詩であると解説し

た。

この度真山のなまはげ館も観てきたが、そこで澤木隆子のなまはげ論に接し一驚する『日本古来の神道が佛教などの外来宗教に押され衰退した怨霊の形がなまはげ』の大意。流石に晩年万葉集や古事記を耽読した詩人のユニークな推理と感嘆。真山のなまはげには角が無い。

■第七八六信（平22・11・3）

第四詩集『水を聴く』を刊行した。平成十三年に『白雲木』を出してから約十年になる。第二詩集『しべぶとん』がその十年前だから、私の詩集は十年ごとに日の目を見たことになる。生きて詩を書き残す喜びは冥利に尽きる。

今回、日頃お世話になっていらっしゃる方々に送呈したら、今までと一風異なる感想をいただいた。その中から抄出する。

〈禅の境涯を言葉に表現された。中でも「山門」と「玄関」には日常の生活者としての視点を感じた〉という。ある詩人からは〈日本人の表皮の下に息づいている生死観に、根を下ろした深い所からの呼びかけの

声が、詩行から聞こえてくる不思議な詩集〉（現実の世界（山）から向こうにあるもう一つの世界（山）が見えるような）とある。

義妹からは〈いのちの探求を作詩の根幹に据えて生み出される言葉〉から〈事象に対する深く鋭い観察眼に加えて慈愛あふる心が伝わってくる詩〉という。しかも亡夫の佛前に〈詩集から二篇ずつ毎夕朗読している。主人もさぞかし感動し聴いてくれておると信じて〉と記す。《詩禅一如》の試みがこれほど日常に根づくとは望外の幸せだ。

■第八〇一信（平23・7・3）

先日拙詩集『水を聴く』の出版を祝う集いを、私の寺で開催した。普通ならばホテル等でおこなうのであるが、今回は著者私のわがままを通していただいた。実は大変欲張りな五部まである企画である。それを半日で実施した。

①茶道へのいざない（茶室・野点の席）新設の水琴窟を聴く。②点心（昼食）その時梵妻が添菜したごまとうふ、かぶのサーモン巻きが好評。③野の花を自在に活ける。そのあと花屏風に飾り佛前に献花。④大震

災物故者精霊供養会。⑤詩集出版お祝いパーティ等々。盛り沢山だが二十八名の出席者全員、本当に楽しかったと口々に話していた。

この中から③の野の花展について所感を述べたい。茶の湯では茶花と称して生け花が不可欠である。それも、野の花でなければならぬ。集いの早朝、茶事にくわしい知人が近辺の野の花を採集して届けて下さった。これを当日皆さんがそれぞれ気のおもむくままに花入れや花器を選び生け花を楽しんだ。《花は野にあるように》とは利休の言葉である。全くの素人であったが実に風情のある展示になった。それを震災精霊供養の佛前に供え冥福を祈念した。

■第八〇七信（平23・10・16）

青森駅前（ヘワ・ラッセ）で開催の「東日本現代詩ゼミナール」に出席した。小ホールで音響効果もよく『方言詩の高木恭造と幻の叙情詩人村次郎』を聴く。パネラーの津軽なまりが心地よい。正に土地と深く関わっていると痛感。詩の朗読は首都圏と東北各県から出演。コメントと自作詩朗読。大震災主題が多い。青森県の詩人は舞踏との共演で不思議な雰囲気をかもし

だす。伴奏を勤めた津軽三味線奏者は、尺八・横笛も演奏する多才ぶりで驚き入った。

場外から地鳴りの様なねぶたの太鼓（常設のねぶたの囃子）古典芸能と現代芸術の見事な調和ぶりの舞台に酔い痴れる。秋田はこの域に達していない。

ついでに青森県立美術館での「光を描く印象派展」を鑑賞する。大変な観客数であった。しかしじっくり観てまわる。総じて描画の技法とか印象派誕生の謎を解く解説は、時に直感を否定する危険に繋がる。絵画展はやはりその絵に接した時の感性が勝負であろう。

また「詩人・村次郎展」を青森県近代文学館で観賞した。八戸の自然と風物にこだわった詩作品は異彩を放つ。津軽と南部はすごい魅力溢れる楽土だ。

■第八三一信（平24・11・16）

詩誌「密造者」に関係してから四十七年になる。刊以来の同人であり、更に七集から編集を任されて現在八十五集。今では秋田県の代表的詩誌といわれている。ところで恒例の親睦と作品合評を兼ねての一泊研修会開催。今年はずっとあ藤里温泉で同人及び詩友十名の参加を得て実施した。いつも時間に追われる合評

会も会場に宿泊できるので鋭くつつこんだ批評が交された。

しかも発行同人の畠山義郎さんが車椅子で参加。本人は最近とみに視聴覚が不自由になった様子だが、どうしても合評会に出たい意志。その詩人魂の炎に私達は焼かれる思いであった。

氏は衆知のように、村長と町長職を連続四十四年勤めた著名な政治家だ。また若い時から詩を書き秋田県を代表する詩人でもある。ある時本人に「究極的に詩と政治のどちらを選ぶか」と聞いたなら「やはり詩だ」という。すでに立派な詩碑を大野台に建立。来春には詩集の集大成ともいふべき《全詩集》を出版の準備中だ。氏は合評会の時私に「出席者を教えてほしい」という。誰かよく見えぬらしい。人と人との縁、特に詩人のつながりを大切にする方だ。

■第八六五信（平26・6・1）

この地域の人が少しでも詩の感性を磨いてほしい、現代詩を根づかせたい、そんな思いで始められた講座の生みの親である寺田ヤシ先生が、久しぶりに車椅子でお越し下さった。先生の眼は緑内障でほとんど見え

ないという。だが是非講座の皆さんに伝えたい事があり出席したという。それは故畠山義郎さんが何度も先生に語ってくれた次のエピソードであった。

現在講座の一人である工藤直子さんの〈結婚を祝う会〉のサブライズである。昭和五十年六月十五日、きみまち阪、第一広場で野外パーティが催された。宴たけなわの刻、正面の切り立つたびょうぶ岩から突然するすると大きな垂れ幕が下がってきた。墨痕鮮やかに《学くん直子さん結婚おめでとう》と大書している。みんなあつげにとられ大拍手である。畠山さんは「これが詩だ、詩そのものだ」と大感激された。それから約四十年、これを伝え聴いた寺田先生が、心底深く秘めていたのはまさに〈詩の熟成〉である。きみまち阪での奇抜な祝婚の演出は、一篇の円熟した詩の形で、私達にあつたかいふくよかな、感動をもたらしただけである。

■第八七四信（平26・11・2）

第29回国民文化祭。現代詩フェスティバルが終了した。この大会の企画から実施に涉りいささか関係した一人として大過なく文化の大冊のページを閉じた事に、

故しれぬ慶びを感じている。

なにしろ詩の公募をしたら全国から四六〇〇篇の詩作品が寄せられた。その内二六〇〇篇の一次選考をやった時は、一日に五〇〇篇ずつ読み選評のノルマである。時季が暑い盛りであり心身の調子を崩さない事に気をつかった。それを乗り切れて異常が無かったのは日常欠かさない暁天打坐の賜物であろう。早朝四十分、頭の中をカラッポにする。思考性を無にするのがどんなに大切か、身をもって体験できた。

この大会一日目の「詩作の旅」も良かった。貸し切りバスで阿仁部を巡る。北欧の杜公園でのチェンソーアート。木作りの赤とんぼの群舞。旧浦田小校庭のぶらんこを内蔵した大船など、感性鋭い展示アートに圧倒された。それがみんな森吉山頂上を向いていたのはどうしてだろうか。どうも大地の神の磁石に吸い寄せられる不思議さだ。これを参加者全員が即興詩として表現したが、どんな詩が創作されたであろう。

* 「はがき禅」は、筆者の亀谷氏が昭和四八年一月二日から始めた「月二回、日本中の知己に飛ばす風信」で、今年の五月で八八五信を数えたが、その中から詩や詩人に関するものを掲載した。なお「はがき禅」

は、「ひとひらの禅』『生死のひとしづく』『やすらぎの埋み火』『みちのくの風骨』（四海山太平洋寺黙照会刊）にまとめられている。

【後記】

詩集『水の花束』（小肆刊）の著者・矢代レイ氏から個人詩誌「ピッタインダウン（おきあがりこぼし）」創刊号を送付された。四ページながら、詩に対する真摯な姿勢と、未来志向の *vision* の試み。

それで思い出したのは、秋田文化出版社時代に、印刷機があったので、PR誌として「秋文かわら版」（のち「らんぶのおと」と改題）を出していたことであつた。

そんなわけで「書肆えん通信」を出すことにした次第。

▲亀谷氏の色紙

